

寺院名	夷 岩 屋		寺院番号	㊥
所在地	大字夷			
居住状態	有住	各種文化財 員 数	種 別	個 数
指定文化財	六郷山夷岩屋の寺社境内（県史跡） 六所神社磨崖像（市有形） 霊仙寺国東塔（市有形） 霊仙寺地蔵尊像（市有形） 霊仙寺仁王像①（市有形） 霊仙寺仁王像②（市有形） 実相院国東塔（市指定） 焼尾阿弥陀堂（市有形） 焼尾塔ノ本国東塔（県有形）		木 造 建 築	2
			礎 石 跡 等	1
			石 造 物	14
			仏 像	1
			美 術 品	
			古 文 書	
			そ の 他	1
			特筆すべき 文 化 財	・ 仁王像残欠（写真No.2）
・ 木造仏（写真No.14）	・ 霊仙寺山門（写真No.23）			
・ 旧霊仙寺墓地石塔物（写真No.29～38）	・ 円徳屋敷国東塔（写真No.47）			
・ 円徳屋敷磨崖碑（写真No.48）	・ 十連五輪塔群（写真No.49）			
・ 坊中岩屋宝塔（写真No.51）	・ 大力坊観音堂跡（写真No.54）			
寺 院 管 理 状 況	<p>&lt;文化財管理状況及び聞き取り調査概要&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 霊仙寺及び実相院については、各住職により管理が行われている。また、六所神社の境内は近隣の方の寄合所となっており、清掃などの管理も行われている。</li> <li>・ 六所神社の東側の岩屋については、枯葉などによりやや荒廃している印象を受ける。また、岩屋内にある御堂については、倒壊の可能性がある。</li> <li>・ 実相院墓地周辺は、斜面地ということもあり倒木などが目立つ。また、霊仙寺墓地についても落石などがみられる。</li> <li>・ 旧霊仙寺墓地については、磨崖碑などもやや風化しており、五輪塔の崩落なども目立つ。</li> <li>・ 大力坊観音堂に安置されていた仏像に関しては、観音堂の取り壊しの際に旧香々地町役場の方に預ける形で保管しているということである。</li> </ul>			
寺院史概略	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 霊仙寺（夷岩屋）は、養老二年（718）に仁聞菩薩開基と伝えられる。文献資料において霊仙寺の記載がみられるものとしては、長承四年（1135）の『夷住僧行源解状案』の「夷岩屋」とあるのが初見である。また、安貞二年（1228）『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録』では「夷岩屋」と合わせて「本尊は千手観音」とされている。</li> <li>・ 建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』では、末山の内に夷山とあり、その末寺として今夷・焼尾岩屋・願成寺の名がみられる。</li> <li>・ 天文十年（1541）の『夷地見坪付注文』には、夷岩屋付属の坊・院と思われる得万坊・妙鏡坊・中ノ坊・善花坊・根本院・法花坊といった名がみられる。</li> <li>・ 天文十二年（1543）の『大力坊澄祐表白文』には「六郷霊山寺」とある。</li> <li>・ 『太宰管内志』には「本尊は不動明王なり」と記載がみられる。このことから、要因は不明であるが近世段階において本尊が千手観音から不動明王へ変わったものと推察される。その他、余瀬家文書にある、嘉永五年（1888）の『庄屋日記』正月6日項には、夷村六所宮の裏岩が落ち、「講堂不動堂阿美陀堂龍王宮常夜燈」などが破損したとある。</li> <li>・ 昭和4年発行の『三重郷土誌』には、「本尊は初めは千手観音、中頃より不動明王及び阿彌陀如来であったものを明治37年12月允評を得て、千手観音に改めたのである。」と書かれている。また、坊跡も石成坊、法花坊、洞石坊、養泉坊、善花坊、中之坊、什林坊、願成就寺の8ヶ所が記されている。坊跡については、昭和54年の『香々地町誌』では、徳間坊、彦之坊、北之坊、大力坊の4ヶ所が新たに追加されている。</li> </ul>			

## 寺院現況及び変更点

- ・夷地区周辺については、霊仙寺、実相院、六所神社並びに坊跡や岩屋等、調査対象地区が多い。そのため、①六所神社周辺、②実相院周辺、③霊仙寺周辺、④霊仙寺旧墓地、⑤周辺坊跡及び岩屋の五つに大別し報告する。

### ①六所神社周辺(図版①、②: 霊仙寺位置図・霊仙寺境内図参照)

- ・霊仙寺は豊後高田市夷地区に所在しており、竹田川と県道の北側に面している。六郷山寺院の多くが『縦伽藍』であるのに対し、当寺は『横伽藍』であり特徴的である。また、近世段階の資料である『太宰管内志』にみられる「後ノ方に大岩あり」や「講堂は半町上流にあり」といった記載から現六所神社(写真No.1)が夷岩屋と想定される。
- ・六所神社の境内は、堀と石垣に囲まれており、2つの段から形成されている。一段目は約1600㎡の広さを有しており、山門過ぎて左側に社務所、右側に手水場と池が存在している。この手水場のさらに東側には、石造仁王像の残欠が1 軀と岩面が露出している地点に磨崖像が3 軀浮き彫りされている。仁王像は、首から上が消失しており、膝からは地面に埋没している状態である。(写真No.2) 磨崖像については、左から「比丘尼形坐像、比丘形坐像、比丘尼形坐像」の順に彫り込まれている。(写真No.3)
- ・磨崖仏が彫られている岩面の上部で、板碑が1 基半損した状態で置かれている。(写真No.4)
- ・境内二段目へ続く石段を登ると、約900㎡程の平坦面が存在している。石段の左右には宝永三年(1706年)から安政五年(1858年)に製作された石灯籠が8 基並んで立地している。(写真No.5) 銘文などは、現状でも十分に確認できる。
- ・石灯籠と同平坦面上に拝殿(旧拝殿跡基壇)・申殿・本殿がある。(写真No.6) また、本殿向かって左側の岩壁に沿って、大綿積社、さらにその左側に板石が4 基確認できた。(写真No.7) この大綿積神社の別名が、以前報告されている龍神社である。
- ・拝殿向かって左側に神饌所が立地している。その裏側の岩肌沿いに、石祠1 基と鳥居の神額と思われる残欠(写真No.8)があり、神額には「龍神王」の銘が刻まれている。この神額の残欠から、南東に約10m程の場所に、鳥居の台石のような石造物を1 基確認した。推察の域を出ないが、本来はこの場所に大綿積社の鳥居が存在していた可能性は十分に考えられる。
- ・本殿向かって右側に、賀来社と太子社(写真No.9)が立地している。両社とも江戸時代後期のものであるが、特に目立った欠損などはみられない。さらに、この二つの社の右側の岩肌のやや高い位置に夷神社(写真No.10)が立地している。19世紀初頭頃の築造とされており、社がやや高所に立地しているため小規模の石段が形成されており、登り口には鳥居が存在している。
- ・夷神社へ登る石段右側に、10基の石祠と神額及び五輪塔残欠と思われる部材1 点が置かれている。(写真No.11) 以前の報告では、「6基の石祠と天満宮の扁額…」と記載されているため、その後、石祠や五輪塔残欠を他の場所から移設したのか、石段付近の石祠のみを報告したのかは不明である。
- ・夷神社から石祠群の前を通過し、さらに東側へ移動すると鳥居残欠と台石並びに石祠1 基が存在している。(写真No.12)
- ・六所神社の東端には、急峻な小道が存在しており、これを登ると石垣で形成された小規模な平坦面が岩窟に沿う形で形成されている。この地点が、旧六所権現跡とされており、簡素な造りの御堂内に木造仏が数体残されている。(写真No.14) 木造仏は風化が著しい印象を受ける。
- ・御堂向かって左側の岩肌には、仁聞菩薩磨崖像もしくは六所神社薬師堂磨崖仏と呼ばれる磨崖仏が1 軀あり、以前の写真と比較しても風化などの著しい劣化は確認できない。この磨崖仏と御堂の間に、五輪塔が1 基位置している。(写真No.13)

### ②実相院周辺(図版①、②: 霊仙寺位置図・霊仙寺境内図参照)

- ・実相院(写真No.15)は、霊仙寺と六所神社の中間に位置している。『太宰管内志』の記載から推察すると、霊仙寺もしくは夷岩屋の子院の可能性が示唆されている。境内は約1100㎡の広さを持ち、本堂・庫裡・山門(写真No.16)・鐘楼(写真No.17)などから構成されている。境内の石造物については、石像4 基・五輪塔7 基・宝塔1 基・石灯籠1 基(写真No.18)が確認できる。また、市指定有形文化財である、高さ3.69mの実相院国東塔(写真No.19)も存在している。
- ・本堂北側の山腹に実相院墓地が存在している。墓地には、13基の無縫塔及び墓碑、2 基の板碑が存在している。以前の報告では「13基の墓碑と1 基の板碑・・・」と報告されておりその数が相違しているが、墓地と六所神社の間の谷部で擁壁工事が行われており、これに関連して石造物の移動が行われた可能性も考えられる。(写真No.20)

### ③霊仙寺周辺(図版①、②: 霊仙寺位置図・霊仙寺境内図参照)

- ・霊仙寺(写真No.21)は本堂・庫裡・山門・大師堂(写真No.22)などから構成されている。本堂に安置される本尊の木造阿弥陀如来坐像は、樟材の一木造で平安後期(12世紀)の造立である。また、木造千手観音菩薩立像は、桧材の寄木造で鎌倉後期の造立である。梵鐘は無銘であるが、形態的特徴から室町後期の铸造と思

われる。山門は、六所神社より明治期に移設されたもので、仁王像が配置されている。(写真No23) 山門右側には、石塔物が集中しており、多数の五輪塔や石碑・石祠・宝塔・板状五輪塔(写真No24)などが集積されている。また、市指定有形文化財である霊仙寺国東塔(写真No25)も、この山門右手側の石塔物群内に立地している。

- ・本堂と大師堂の間に、市指定有形文化財である地藏像と仁王像が立地している。(写真No26) 長安寺蔵の『六郷山年代記』には、万延元年(1860)に「夷山賢広 一丈六一尺ノ石地藏造立」と記される。
- ・霊仙寺の境内南東側の土壁部分がなくなり、現在進入口になっている。これに関連して、現代墓が大師堂の東側に移設されている。また、この現代墓の横に石段が新たに形成されており、この石段を登ると現代墓と思われる新しい五輪塔が、岩盤を掘り込んで作られた龕の中に立地している。
- ・大師堂北側の岩面が露出している地点において、五輪塔・石造仏・石碑などが密集して置かれている。中には宝篋印塔なども確認でき(写真No27)、最上段の平坦面上には墓碑が5基立地している。
- ・本堂より北東側の山腹の斜面部に霊仙寺墓地が立地している。無縫塔等の墓碑が約25基確認することができた。しかし、以前の報告によると35基の墓碑が確認されている。これは、周辺からの落石や倒木の影響で墓碑が倒壊した可能性が考えられ、現に周辺には墓碑の部材と思われる石材が散乱している。(写真No28) また、実相院墓地と同様に、霊仙寺本堂裏側の谷部においても、擁壁工事が行われており、現在は境内から直接墓地へ移動する道はなく、庫裡・本堂の裏側を通過する形で霊仙寺墓地へ向うルートのみである。
- ・霊仙寺墓地へ向う里道の左手側に、近代の墓地群が立地している。住職によると小川家の墓域であるという。霊仙寺との関係は不明である。

#### ④旧霊仙寺墓地<図版②、③: 霊仙寺境内図・旧霊仙寺墓地 主要石造物位置図参照>

- ・六所神社から竹田川を挟んだ対岸に旧霊仙寺墓地が存在している。墓地は、道路から斜面地を20m程登った崖面の下に立地しており、その崖面に沿って多量の五輪塔を主体とした石造物群が存在している。五輪塔は、15世紀前半を上限とし、16世紀にピークがある。以下、主要石造物の現況について報告する。
- ・磨崖碑、磨崖五輪塔①…旧墓地西側上段の岩面にあり、合計3基の五輪塔と四連碑が確認できる。(写真No29)
- ・磨崖五輪塔②…旧墓地中央部上段の岩面にあり、合計3基の五輪塔が確認できるが、風化が著しい印象をうける。(写真No30)
- ・磨崖碑③…旧墓地中央部の最下段にある。板碑型の磨崖碑であり、周辺は倒木や枯葉などの堆積が目立ちやや埋没している。(写真No31)
- ・「権律師澄慶」板碑型墓碑、石殿①…両者とも、旧墓地上段から二段目の平坦面上に立地している。板碑型墓碑に関しては、元禄六年(1695)の銘が残る。両者とも以前報告されている状況と大きな変更点は確認できない。(写真No32)
- ・異形板碑型墓碑…旧墓地前を通る道路に面した岩上に立地し、板碑は戒名を記す部分が並列して彫り窪めである。(写真No33) また、似たような板碑を墓地東側の巨石の上段(後述する宝篋印塔が立地する地点)で確認したが、岩上段に登ることができず、正確には断定できない。
- ・国東塔①、②…両者とも磨崖五輪塔②のすぐ北側に立地している。(写真No34、35)
- ・連碑①…旧墓地西側にあり、以前の図面と比較しても位置移動や欠損などはみられない。(写真No36)
- ・連碑②…旧墓地西側の最下段に位置している。倒木や枯葉などにより埋没している。(写真No37)
- ・宝篋印塔、石祠、板碑?…旧墓地西側の道路に面した巨石上段に立地している。板碑に関しては、前述した異形板碑の可能性も考えられるが、立地的に確認することができなかった。(写真No38)

#### ⑤周辺坊跡及び岩屋など<図版①: 詳細位置図参照>

##### ◎善花坊

- ・上坊中には、善花坊・焼尾岩屋・今夷岩屋が集中して立地している。六所神社前の県道653号を東側へ約500m程で、谷部に沿うような形で上坊中の集落がある。この付近が、善花坊(写真No39)と呼ばれる坊跡の遺称地である。周辺の北側に面する山の斜面部には、墓地群が形成されており、宝塔が2基と近世墓碑が2基(1682年・1630年)報告されている。周辺の踏査を行い、宝塔と思われる部材を2基分(写真No40、41)確認したが、倒壊している。いずれも16世紀後半の造立である。墓碑についても、天和二年(1682年)のものは、半損した状態で確認することができたが(写真No42)、もう1基の寛永七年(1630年)については確認することができなかった。墓地周辺は、現在竹林になっており倒木などが目立ち、やや荒廃している印象を受ける。

##### ◎焼尾岩屋

- ・善花坊より県道653号線を南側に向って移動すると、右側に焼尾岩屋跡とされる現阿弥陀堂(写真No43)が立地している。御堂内には、12世紀後半頃の作とされる阿弥陀如来立像が安置されている。(写真No44) 阿弥陀堂の西側は、斜面地になっており庚申塔2基や五輪塔などが存在している。また、県指定有形文化財である南北朝期後半の焼尾国東塔(写真No45)が立地している。

#### ◎今夷岩屋

・今夷岩屋は、善花坊や焼尾岩屋からやや西側へ移動した「蛭兒大神宮」がある位置が推定地として考えられている。現在は道路に面した地点に入口があり、石塔と鳥居へ続く階段がある（写真No.46）。その階段を登るとやや開けた平坦地が存在しており、その平坦面上段に岩屋があり、その岩屋（岩窟）内に堂が立地している。堂の右側には木材の廃材などが置かれており、周辺はやや荒廃している印象を受ける。

#### ◎円徳屋敷

・霊仙寺の西側隣接地が「円徳屋敷」の遺称地とされている。相輪と笠部が欠失している国東塔（写真No.47）及び貞享5年（1688年）銘の磨崖碑（写真No.48）を確認した。

#### ◎十連五輪塔群・坊中岩屋

・霊仙寺から県道653号線を西側へ移動すると、字十連の北側山腹に坊中岩屋が存在している。道路から入ると小高い岩場が存在しており、この岩場の上に多量の五輪塔部材が集積されている。（写真No.49）同時に、この岩場の下にも上面から落下したと思われる五輪塔の部材が散乱している。また、この岩場に立掛けられるように二連板碑が1基存在している。

・岩場からさらに山を登ると、人工的に開鑿された岩窟が存在しており、坊中岩屋（写真No.50）と呼ばれている。岩屋内には、石造宝塔が3基（写真No.51）存在している。以前の写真では、3基ともに立っている状態で掲載されているが、現在は右側の宝塔は倒れている状態であり、笠部材もやや離れた位置に置かれている。また、岩屋の中には石像仏が3体ほど安置されている。

#### ◎中ノ坊

・現在は、民家や畑地となっており、石造物などは確認できない。（写真No.52）

#### ◎得万坊

・得万坊は、中の坊から県道653号線を約400m程下った北側の低い台地上が推定地とされている。推定地周辺は集落地であるが、道路に沿う形で墓地群が形成されている。（写真No.53）しかし、時期的に近世のものが中心であるため、得万坊との直接的な繋がりは確認できない。

#### ◎大力坊

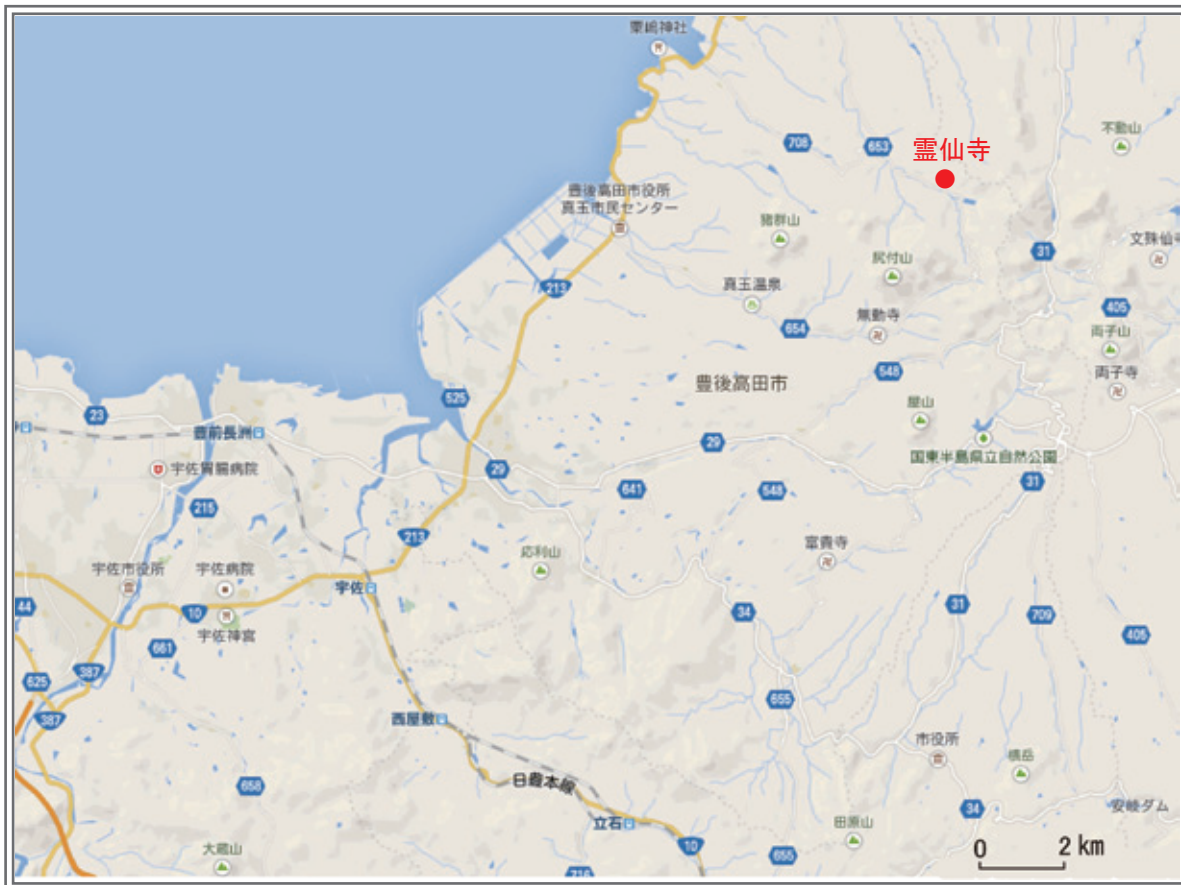
・大力坊については、長小野地区にあり、現在日枝神社から見て南側の集落内に大力坊観音堂跡がある。平成25年度の現況確認調査の聞き取りにおいて、10日程前に朽ち果てた堂宇を重機を使用して撤去したということである。現在は、縁石のみが残されている。（写真No.54）また、観音堂跡地には、石祠や五輪塔の水輪や火輪と思われる部材、また宝塔の台座及び塔身と思われる部材が残されている。

・集落から南東側の山腹に、この辺り一体の墓地が形成されている。墓地群は山林の広い範囲で展開しており、道路に面している地点では多数の五輪塔や石祠、また六地藏といった石像仏を確認した。基本的な近世代のものが中心である。この墓地群から、さらに山頂に向かって登って行くと、山の中腹辺りに無縫塔2基と墓碑3基が存在している。無縫塔の時期については、宝暦七年（1757）と文政十一年（1828）がみられる。また、山頂付近には庚申塔が倒れた状態で置かれており、寛文十三年（1673）の銘が確認できることから、下段の墓地群や無縫塔と比較するとやや古い時期のものである。この庚申塔のすぐ横で、板碑と思われる石造物を1基確認した。

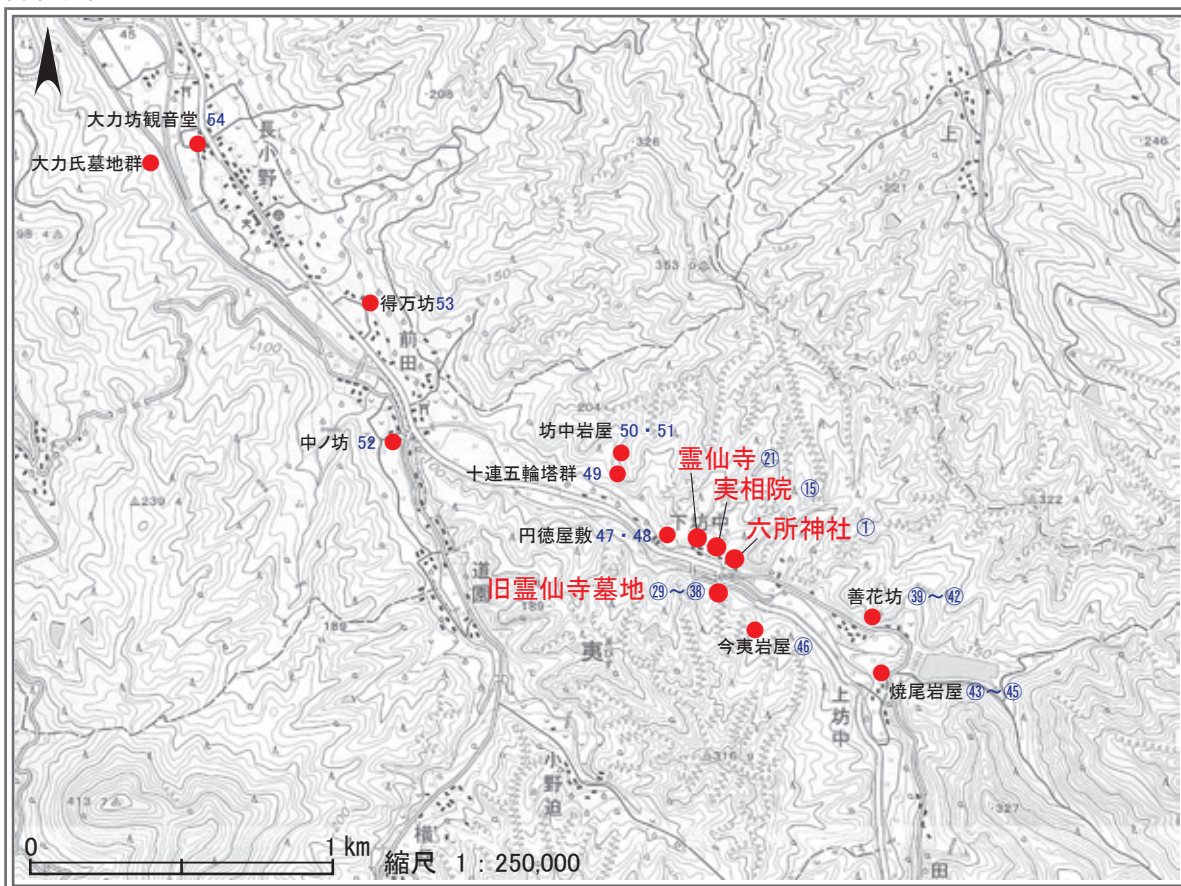
#### 《主要参考文献》

- ・『豊後国香々地荘の調査 本編』 大分県立歴史博物館報告書第1集 大分県立歴史博物館 1999
- ・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅲ』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第15集 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1995
- ・『六郷満山関係文化財総合調査概要 - 豊後高田市・真玉町・香々地町の部 -』 大分県文化財調査報告書 第37輯 大分県教育委員会 1976

図版① 霊仙寺 位置図  
市域位置図



詳細位置図



※番号は、写真No.とリンク

香々地地区



凡例

○	国東塔	□	台座のみ
●	宝	△	板
■	五輪塔	◆	通
▲	一石五輪塔	★	石殿
		多量散布地・堆積地	

※赤マークで表記してあるものについては、現況写真添付

図版③ 旧霊仙寺墓地 主要石造物位置図



## 文化財の現況・詳細（1）



1：六所神社

図版①、②参照／時期：中世

- ・境内には六所神社・賀来社・夷社・大綿積社が祀られている。
- ・文献史料から復元すると、当神社が旧霊仙寺跡「夷岩屋」と考えられる。



2：仁王像残欠

図版②参照／時期：近世か？

- ・六所神社磨崖仏に隣接している。
- ・阿形像で頭部を欠いている。脚部は埋没している。
- ・対となる吽形については、不明である。



3：六所神社磨崖仏

図版②参照／時期：室町中期

- ・山門を過ぎて右側に位置する。
- ・磨崖像は摩耗が激しいが、中央に比丘形坐像でその両側に比丘尼形坐像の3体とされる。
- ・覆屋は石造である。前面に堂の痕跡が残る。
- ・室町時代中期の作とされ、市指定の有形文化財に指定されている。



4：板碑

図版②参照／時期：－

- ・六所神社磨崖仏が彫られた岩山の頂部に位置している。欠損しており詳細は不明である。



5：石灯笼群

図版②参照／時期：宝永3年～安政5年

- ・参道の石段を上ると、拝殿の前に至る。その両側に石灯笼が8基建っている。
- ・宝永三年(1706)から安政五年(1858)にかけて建てられたものである。



6：本殿

図版②参照／時期：－

- ・本殿は岩陰に建てられている。写真手前には、基壇跡と考えられる区画が確認できる。かつて講堂があったとされ、礎石が規則的に並んでいる。



## 文化財の現況・詳細 (2)



7: 板石状石造物・大綿積社 図版②参照/時期: 江戸後期

- ・ 本殿の左側に位置する。
- ・ 板石は岩肌を方形に彫られた中に安置されている。銘文等は、刻まれていない。
- ・ 大綿積社に関しては、江戸時代後期に築造されたものということである。



8: 石祠・鳥居残欠

図版②参照/時期: -

- ・ 大綿積社の左側、崖沿いに位置する。鳥居の神額が残されており「龍神王」と刻まれる。
- ・ 前面には鳥居の台石が1ヶ所残されており、同一部材であろうか。



9: 賀来社・太子社 図版②参照/時期: 江戸後期から幕末

- ・ 本殿の右側、崖沿いに位置する。
- ・ 嘉永五年の余瀬家庄屋日記及び『太宰管内志』に記載されている。
- ・ 賀来社が幕末、太子堂が江戸後期の建築とある。



10: 夷神社

図版②参照/時期: 19世紀初頭

- ・ 社殿内に9軀の平安後期造立とされる木造仏が安置される。いずれも樟材の一木造である。
- ・ 前面の石造門については、宝暦九年(1760)銘が残る。



11: 石祠群・五輪塔残欠

図版②参照/時期: -

- ・ 夷神社の前面に石祠7基・神額1基・五輪塔部材が残る。
- ・ 神額には「天満宮」とみられる。



12: 鳥居残欠・石祠

図版②参照/時期: -

- ・ 夷神社の前面において確認した。
- ・ 鳥居の部材は「天満宮」の神額と同一であろうか。

## 文化財の現況・詳細 (3)



13: 堂及び岩屋 図版②参照/時期：－

- ・夷神社より右側へ上ると岩窟に堂が位置している。
- ・堂の左側の岩肌に残る磨崖仏は、仁聞菩薩といわれている。16世紀の作と考えられる
- ・旧六所権現とされている。



14: 木造仏 図版②参照/時期：－

- ・堂の内部には、5 軀の木造仏が残る。破損がはげしく詳細は不明である。



15: 実相院全景 図版②参照/時期：－

- ・境内地は約1100㎡で、本堂・庫裡・鐘楼が残る。



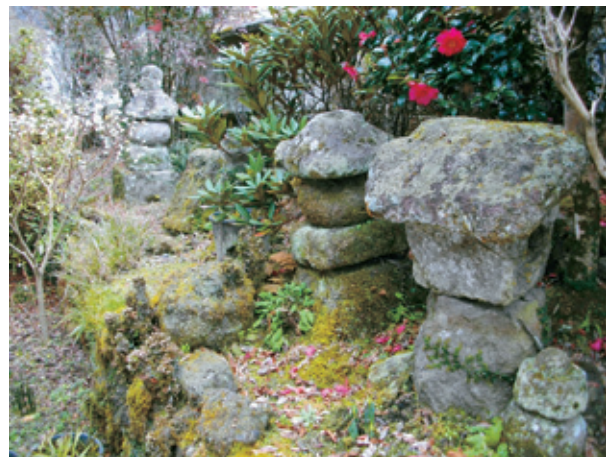
16: 山門 図版②参照/時期：－

- ・山門脇の石柱には、九州不動霊場五番札所とみられる。



17: 鐘楼 図版②参照/時期：－

- ・鐘楼の土台部分は山門周辺の工事と同時期に建設されたものである。



18: 実相院 石造物群 図版②参照/時期：－

- ・境内に五輪塔やその部材が集積されている。

## 文化財の現況・詳細（4）



19:実相院国東塔 図版②参照／時期：15世紀前半～中頃

- ・かつて六所神社の境内に所在していたが、明治の神仏分離令の時に前面の川に捨てられていたものを大正時代に当時の住職が移動したものである。
- ・制作年代は、15世紀前半から中頃と報告されている。



20:実相院墓地 図版②参照／時期：－

- ・本堂の裏側に住職の墓が位置している。宝永六年（1709）銘が最も古く、昭和五十三年（1978）が最も新しい。13基が確認できる。
- ・南北朝前期と見られる板碑が2基確認できる。



21:霊仙寺全景 図版②参照／時期：－

- ・境内地は1400㎡で、本堂・庫裡に山門・大師堂が残る。
- ・境内には川を挟んだ対岸にある霊仙寺旧墓地から移築したという国東塔1基と五輪塔19基分がある。



22:大師堂 図版②参照／時期：－

- ・建造物としては新しい。



23:山門・仁王像 図版②参照／時期：近世か？

- ・山門は六所神社に位置していたが、明治の神仏分離令の時に移築したものといわれている。
- ・仁王像も六所神社より移築されたものという。厚さ25cm程の板石に彫刻した半肉彫りである。



24:板状五輪塔 図版②参照／時期：－

- ・銘などは不明である。

## 文化財の現況・詳細 (5)



25: 霊仙寺国東塔 図版②参照/時期: 15世紀後半~16世紀

- ・ 霊仙寺旧墓地に位置していたが、昭和50年代初頭に移動したという。15世紀後半~16世紀の製作とされる。
- ・ 五輪塔についても15~16世紀の作である。



26: 地蔵像・仁王像 図版②参照/時期: 19世紀後半

- ・ 地蔵像は安政七年(1860)に板井利三郎国良・板井林三郎国政等が石工となって造立されている。
- ・ 仁王像は嘉永七年(1854)の造立であり、石工は阿形が板井法橋国良で、卍形は板井林三郎国政である。



27: 霊仙寺石造物 図版②参照/時期: -

- ・ 大師堂の裏側に五輪塔やその部材が集積されている。



28: 霊仙寺墓地 図版②参照/時期: 17世紀から現代

- ・ 寛文九年(1669) 銘が最も古く、昭和三十年(1955)が新しい。
- ・ 霊仙寺住職をはじめとする僧侶のものであるが、明治以後は住職の家族のものと思われる墓碑もある。



29: 磨崖碑・磨崖五輪塔① 図版③参照/時期: 17世紀初頭

- ・ 霊仙寺旧墓地の最上段の岩肌に磨崖碑・磨崖五輪塔が彫られる。
- ・ 磨崖碑は四つの方形区画に分けられ被供養者の法名を刻む。時期については、慶長八年(1603) 銘が残る。
- ・ 磨崖五輪塔は、3基が彫られる。



30: 磨崖五輪塔② 図版③参照/時期: 室町末期~江戸初期頃か

- ・ 霊仙寺旧墓地の最上段の岩肌に磨崖碑が彫られるが、その左側に位置している。右側の磨崖五輪塔と同様に3基が彫られるが、こちらは風化が著しく、銘は不明である。

文化財の現況・詳細 (6)



31: 磨崖碑③ 図版③参照/時期: -

・ 銘文は確認できず時期は不明である。



32: 「権律師澄慶」墓碑・石殿 図版③参照/時期:17世紀後半

・ 霊仙寺旧墓地の2段目に位置する。元禄八年(1695)銘の権律師澄慶の墓碑を中心として、その背後に石殿や五輪塔が展開する。



33: 異形板碑型墓碑 図版③参照/時期: -

・ 霊仙寺旧墓地の下段に位置する。  
・ 戒名を記す部分が並立し、深く彫られる。戒名は墨書であったと思われる。



34: 国東塔① 図版③参照/時期: 15世紀後半から16世紀

・ 霊仙寺旧墓地の最上段に位置する。  
・ 時期は15世紀後半から16世紀と考えられる。



35: 国東塔② 図版③参照/時期: 15世紀後半から16世紀

・ 霊仙寺旧墓地の最上段に位置する。蓮弁を刻んだ台座を有している。  
・ 時期は15世紀後半から16世紀と考えられる。



36: 連碑① 図版③参照/時期: 15世紀後半頃か

・ 霊仙寺旧墓地の3段目に位置する。戒名は墨書と思われる。  
・ 時期は15世紀後半頃とされる。

## 文化財の現況・詳細 (7)



37: 連碑②

図版③参照/時期: -

- ・ 霊仙寺旧墓地の下段に位置する。戒名は墨書と思われる。



38: 宝篋印塔

図版③参照/時期: 16世紀前半

- ・ 霊仙寺旧墓地に向かって左側の巨石上に位置する。
- ・ 相輪上部を欠損しており、銘文もみられない。
- ・ 時期については、16世紀前半と考えられている。



39: 善花坊

図版①参照/時期: -

- ・ 六所神社より谷沿いに上ると上坊中の集落に至る。この集落付近が、善花坊の遺称地である。



40: 宝塔①

図版①参照/時期: 江戸時代前期

- ・ 善花坊では、2000年の調査で宝塔2基及び江戸時代前期の墓碑2基(1630・1682)を確認している。
- ・ 今回の調査でも、宝塔2基を確認することができた。



41: 宝塔②

図版①参照/時期: -

- ・ 確認できた宝塔と石造物である。
- ・ 2基の宝塔は16世紀後半の造立である。



42: 善花坊 墓碑

図版①参照/時期: 17世紀

- ・ 善花坊では、天和二年(1682)銘の墓碑は確認できたが、寛永七年(1630)銘の墓碑は確認できなかった。
- ・ 天和二年銘の墓碑は半損している。

## 文化財の現況・詳細 (8)



43: 焼尾岩屋 阿弥陀堂 図版①参照/時期: -

- ・ 上坊中集落より県道を進むと、阿弥陀堂へと至る。



44: 焼尾阿弥陀堂内 図版①参照/時期: -

- ・ 阿弥陀堂内には、12軀程の仏像が安置されており、写真右から3軀目の仏像が12世紀後半ごろの作とされる阿弥陀如来立像である。
- ・ 御堂には、嚴重に鍵がかけられている。



45: 国東塔 (塔ノ本国東塔) 図版①参照/時期: 南北朝

- ・ 阿弥陀堂の西側は斜面となっており、南北朝期後半の国東塔1基・庚申塔2基・室町～戦国期の五輪塔が位置している。



46: 今夷岩屋 入口 図版①/時期: -

- ・ 善花坊の対岸に位置している。
- ・ 現在では蛭兒大神宮となっている。



47: 円徳屋敷 国東塔残欠 図版①参照/時期: 戦国期

- ・ 霊仙寺の西側が「円徳屋敷」の遺称地とされている。
- ・ 国東塔や磨崖碑が残る。
- ・ 国東塔は相輪・笠部を欠いている。戦国期の作。



48: 磨崖碑 図版①参照/時期: 17世紀後半

- ・ 磨崖碑には、「貞享五年(1688) 義空道受禅定門霊位」の銘が残る。

## 文化財の現況・詳細 (9)



49:十連五輪塔群

図版①参照/時期:戦国期

- ・坊中岩屋への道中に戦国期の五輪塔の部材の集積を確認した。また、15世紀後半と考えられる二連板碑を1基確認した。



50:坊中岩屋

図版①参照/時期:中世前半

- ・十連の五輪塔群よりさらに上ると坊中岩屋へと至る。
- ・人口的に開鑿された石窟と考えられ、宝塔が置かれている洞内は基壇状に土盛りと石積みが施されている。中世前半期の夷岩屋に関する主要施設の一つと考えられている。



51:坊中岩屋 宝塔

図版①参照/時期:13世紀前半

- ・岩屋内には宝塔3基・石造仏が3躯安置されている。
- ・全体に摩耗が顕著であるが、笠は高さの割に反りが強く、軒口はやや厚い。塔身は、張りのないほぼ円柱状であり、首部は太く長い。13世紀前半頃の製作と考えられる。



52:中ノ坊跡

図版①参照/時期:-

- ・周辺を踏査したが、石造物は確認できなかった。



53:得万坊跡

図版①参照/時期:-

- ・近世墓碑群を確認したが、得万坊との関連は明らかではない。



54:大力坊観音堂跡

図版①参照/時期:-

- ・平成25年に堂宇は取り壊されていた。現在では礎石が残るのみである。観音像は香々地庁舎に移動したと聞き取れた。



寺院名	願成寺		寺院番号	㊾
所在地	大字香々地			
居住状態	無住	各種文化財 員数	種別	個数
指定文化財			木造建築	
			礎石跡等	
			石造物	1
			仏像	
			美術品	
			古文書 その他	
特筆すべき文化財	・柿ノ木五輪塔群（写真No.2）			
寺院管理状況	<p>&lt;文化財管理状況及び聞き取り調査概要&gt;</p> <p>・柿ノ木集落周辺の住民の方々に聞き取り調査を行ったが、中世石造物など願成寺に関連する遺物や遺構などについては確認できなかった。</p>			
寺院史概略	<p>・夷岩屋領長小野の記録上の初見は、平安末期の仁安二年（1167）の『夷岩屋住僧観西解状案』においてであり、夷岩屋の住僧である観西が、師義巖から相伝した長小野の畑地をめぐり、西実房の押妨を停止するように満山大衆に願い出た文書である。また、建仁二年（1202）の『願成寺住僧観西讓状』においては、観西が朝範という人物に土地を譲与したことが記されている。この、義巖・観西・朝範という人物は、いずれも「夷山長小野大力坊相伝系図」に大力坊歴代として記される人物である。これらの史料により、12世紀後半から13世紀にかけて、長小野の地に六郷山夷岩屋領が設定され、後に大力坊領として代々受け継がれる相伝関係が成立していたと考えられる。</p> <p>・建武四年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』に「願成寺夷山末寺 限東美尾 限西笈立松 限南永小野 限北久保大道」と夷岩屋の末寺としてその名がみられるため、鎌倉末期の段階では、夷岩屋領に含まれていたと考えられる。この史料から、願成寺の範囲を復元すると、竹田川が現長小野地区の山王社を過ぎてから左に大きく迂回する辺りの右岸、佐古地区市丸の集落から東の山裾にかけてと想定され、柿ノ木五輪塔がその南端付近にあたる可能性がある。</p> <p>・建武四年（1337）の注文案以降は、文献史料には記載が見られない。</p>			

## 寺院現況及び変更点

- ・当寺に関しては、現在推定地として有力視されている大字香々地字柿ノ木周辺において現況調査を行った。以下、その内容を報告する。

### 〈願成寺推定地〉(図版①：詳細位置図参照)

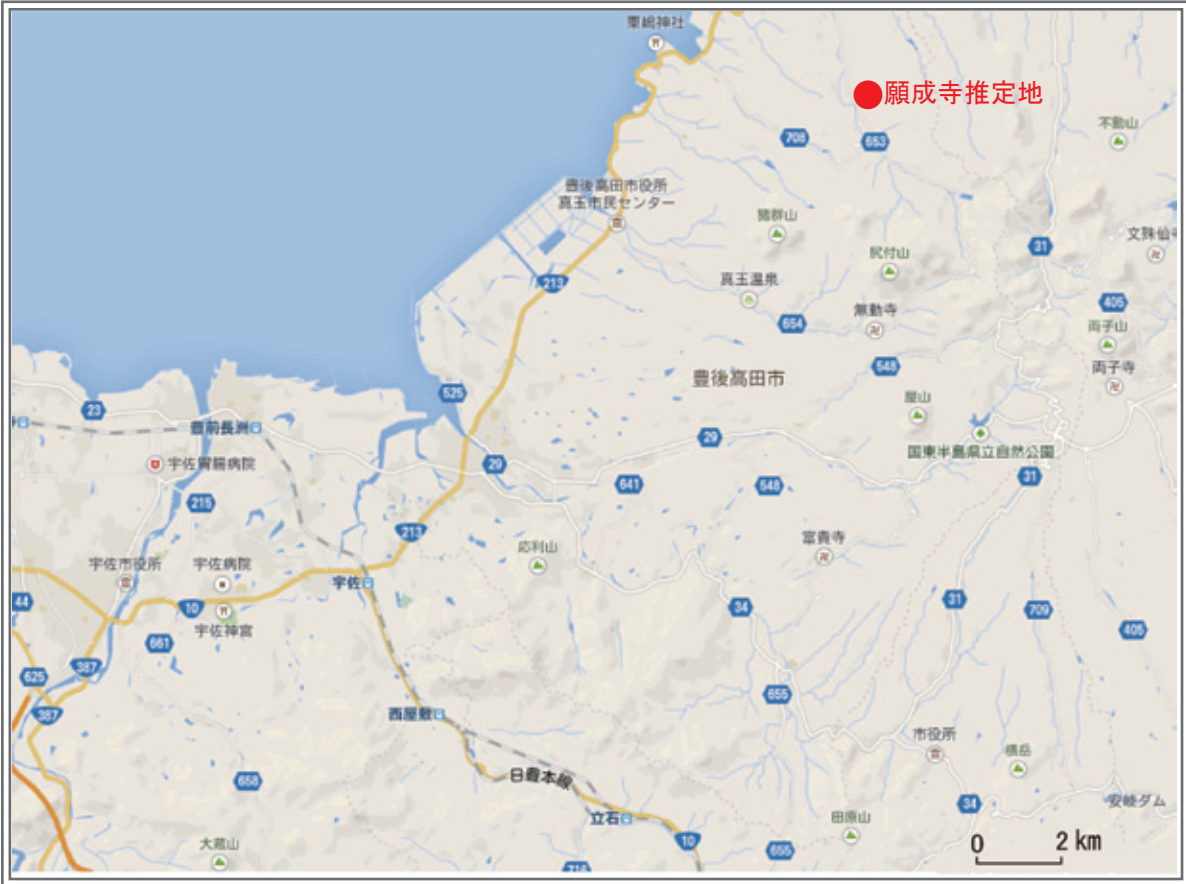
- ・願成寺推定地(写真No.1)には、室町～戦国時代にかけての作とされる柿ノ木五輪塔群が立地しており、現在は民家の裏に集積されている。(写真No.2・3)完形の五輪塔が21基、空風輪・火輪などの一部の部材が欠損するものが9基、部材はあるが組み合わせが空風輪、水輪、火輪の順序で置かれているものが1基、享保年銘の三界萬霊塔が1基(写真No.4)、劣化により銘を確認することは出来ないが、墓碑と思われる石造物が2基確認できる。また、民家へ続く小道に石祠が1基、一石五輪塔1基、石殿2基(写真No.5)、石幢の龕部(写真No.6)と思われる部材を1点確認した。その他、石造仏1体や詳細不明の石造物が2点など、多数の石造物が確認できる。
- ・五輪塔の時期は、室町～戦国期とされており、その中に享保年銘の三界萬霊塔が確認できることなどを加味すると、本来五輪塔群が立地していた地点に、何らかの理由で周辺の石造物を集積もしくは建立した可能性が高いと考えられる。
- ・柿ノ木五輪塔群から北側にある市丸伊勢堂へ続く里道には、墓地群が形成されているが、願成寺との直接的な関係は不明である。
- ・推定地とされる柿ノ木地区の山裾側を踏査したが、寺院関連遺構等は確認することができなかった。

### 《主要参考文献》

- ・『六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅸ』大分県立歴史博物館報告書第5集 大分県立歴史博物館 2001
- ・『豊後香々地荘の調査 本編』大分県立歴史博物館報告書第1集 大分県立歴史博物館 1999

# 図版① 願成寺 位置図

市域位置図



## 詳細位置図



※番号は、写真No.とリンク

香々地地区

## 文化財の現況・詳細（1）



1：願成寺推定地現況 図版①参照／時期：－

- ・竹田川が現長小野地区の山王社を過ぎてから左に大きく迂回する辺りの右岸周辺が寺院跡と想定されている。



2：柿ノ木五輪塔群 図版①参照／時期：室町～戦国

- ・現在民家の裏側に密集した形で五輪塔などの石造物などが安置されている。
- ・室町～戦国期にかけての作とされる。



3：柿ノ木五輪塔群 図版①参照／時期：室町～戦国

- ・五輪塔群の奥に三界萬霊塔、手前に近世板碑型墓碑がみられる。



4：三界萬霊塔 図版①参照／時期：享保2年

- ・享保二年（1717）銘の造立で「三界萬霊一切□□塔、享保二年西七月四日」の銘が残る



5：石殿1 図版①参照／時代：－

- ・柿ノ木五輪塔の北側に隣接して石造物が多数安置されており、その中に石殿が2基みられる。時期など不明であるが、尊仏が4体彫られている。



6：石幢龕部？ 図版①参照／時代：－

- ・柿ノ木五輪塔の北側の民家側において石幢の龕部と思われる部材が1点置かれている。損傷が著しいが4体の尊仏が確認できる。